

教育目標と六領域

豊田いと

◎ その一

今からちょうど一昔前のことになります。戦況がはげしくなったため、しばらく閉鎖されていた幼稚園が、新たに開園

されたときのよろこびは、私にとって忘れられないほど大きいものでした。そして、同時に、戦後の一変した新教育の目標に沿って、幼稚園にも鋭い改革、反省の目がむけられたのです。その、たしか最初の研究会でしたか、園児の生活振りを参観にみえていた幼稚園以外の先生から、「幼稚園には指導性がない」「ただ子どものひとりびとりの中を泳いでい

るといった感じである」「けがをしないよう、ケンカをしないようにとばかり気を配っている高級子守みたいなものである。」

「幼児教育の重要性を認識して、そこで教育をおこなわなければならない」などのきびしい批判がされたことを記憶しています。

十年後の今日、その当時を知らない若い先生がたにとって「指導性がない」とか「もっとしっかりした教育目標をもつべきだ」などは、多分に嘘のように思われるのではない

でしようか？ 新らしい学問を身につけて、毎春その世界に足を踏み入れるかたたちの誰もが希望と自信をもって、幼稚園教育の目標を語りますし、事実、昔のふざけた批評ではあるのですが、「高級子守」式なあり方に満足などしていないからです。

現在ほど幼児教育について、その心理、文化、生理、そして教育など多方面から考えられている時はないと云えるでしょう。そして、幼稚園教育の目標には文部省より「幼稚園教育要領」として、「五目標及び六領域」が明示され、指導要領として幼児教育に従事する者への一つの指針とされています。

云うまでもないことですが、要約すれば、

一、健康で安全な生活が出来るように。

二、集団生活に適應できるように。

三、身辺の社会生活の理解ができるように。

四、ことばを正しく使い、童話や絵本などに興味をもてる

ように。

五、自由な表現活動によって創造性を豊かにする。

ということが出来るでしょう。

ここにはたしかに幼児教育の目標がいかんなく示されていると思います。そして幼稚園教育に従事する私たちにとって最も大切な指針であることには違いありません。

が、私はこんなことを考えるのです。幼稚園教育三十年という××先生からきいた話です。

まだ学窓を巣立ったばかりの、若さと抱負であふれるばかりのかたたちに「あなたは幼稚園の子どもに一番心を入れてやらなければならぬことはどんなことだと思います？」しかしそんな問をかけたときのことです。いかにも張切った、元氣そうな声でAさんは云いました。「幼稚園教育には五つの目標があって、この達成のために六領域があるのです。そしてこの六領域を指導することだと思います。」それから、これらの要領を列挙してくれたのだそうです。

同じ問にBさんは「未分化の子どもを集団生活をさせることによって、その子ども的人間的なものを形成することだと思います。集団生活が元氣で楽しく出来るような子どもに育てることが一番大きなねらいではないでしょうか。」と答えました。

××先生と私とはこの二人の答をいろいろに考えてみました。たしかに二かたとも立派です。特にAさんが何の淀みもなく五目標をスラスラと述べたのは見事だったそうです。が、私は××先生に云っていました。「Bさんはきつと早く子どもの中に溶けこめる人でしょうね。」と。

教育目標は？ との問いに対して、五目標・六領域が出ることは当然すぎることであり、Aさんは熱心な教育者でしょう。

が——何のためらいもなく、立て板に水のように、書かれたことを、そして数えられたことを金科玉条とする危険を私はふと思ったのです。

勿論Aさんは、これから実際の経験を通して、その中で本当に自分で考え、感じたことを把んでいくでしょう。

が、こうした傾向は、すなわち、表示されたものがあまりに立派であるためあって、「自分で考えてみることを怠り、それを唯一絶対のものとしてしまうようなところは私たち一人ひとりの中にあまりにつよすぎはしないでしょうか？ 何も若い先生がたに限ったことではありません。長い経験をも

つはずの私なども、昔と違ってキチンと詳細にわたって「目標」が出されると、何となく安心してしまいがちです。

が、ただ鵜呑みにしているだけでは何の発展性もないのではないのでしょうか。五目標が決められた意義、理由などを考え、同時に自分自身の思索を織りこんでいかなければならぬと思います。新しくこの世界に入られたかたたちに一層強くそれを期待し、合せて自分自身も新年度をより充実させるため反省したいことだと思っています。

◎ その二

幼稚園教育の目標として前述したように「五目標」と「六領域」があります。勿論、それ自体には異論はありませんが、私はそれを把握し実行に移す側として、自分自身の反省も含めて思うところを述べてみたいと思います。

一言で云うなら、ここには「指導」という面がつよすぎはしないだろうか？ ということです。いえ、六領域そのものより、むしろそれを把握する私たち自身の仕方に問題がある、というのが事実でしょう。こうした憶断は他の幼稚園教育に従事されるかたがたに失礼なことですが、私一個人とい

う立場からあえて以下のような疑問を提したいのです。

六領域はややもすると教師を結果主義に陥し入れはしなかつたか？　そして私たちは往々にして、「この通りにしなければならぬ」と思いこみ、領域の本質を弾力性を持たせて生かすことを怠らなかつたか？　ということですが、「これだけのことはこの時期に経験させよう、教えてしまおう」といったあせりがムリに子どもをひきずることは全くなかつたか？……

春になると、新入園児を迎えたどの部屋も子どもの製作した桜の花房や絵で飾られ、五月には可愛い鯉のぼりが何十と泳ぐ(?)——といった風景はほとんどの幼稚園で見受けられることです。そして、これらはたしかに子どもにとって望ましい経験のさせ方であり、また環境の与え方には違いありません。が、杞憂かもしれませんが私はふと考えてしまうのです。そうした望ましい「結果」は本当に望ましい教育——幼児の——によって生れたものか、と。

園児の年齢差は当然あつたわけです。更にその子どもたちの入園前までに培われてきていたものはどうだつたでしょう

か。兄姉のない、文化程度の低い環境で育つた子どもは五才になつてもクレオンを知りません。書いたり、切つたりすることは勿論未経験です。たびたび砂場でみんなと遊んでいた子どもが、「これからリズム遊びの時間ですよ」「粘土あそびですよ」「紙芝居しますよ」ときちんと区分された時間通りに保育室につれていかれるとき、もっとごっこ遊びをしていたい——という感情を示す子どもが多いのは事実ではないでしょうか？

子どもの好きな状態のみにしておくことは「教育」ではありません。と同時に、結果を考えすぎ、興味を示さない子どもにも強いることはもっと危険です。望ましい経験をしようとする子ども、興味の芽を育てることが大切なのであつて、「領域」に正確に沿うために、——と「指導」ばかりを強調することは、「領域」の本質をかえつて害すると思ひます。「その地域の子どもの実体を捉え、子どもを自然な集団の中で総合的に育てることが最も大切なことなのだ」と無意識の中にせよ「領域」によって何か依存欲を強くしていた自分の未熟さを赤面しながら、今そう考えるのです。(東京・松江幼稚園)